

## 備讃瀬戸集中観測打ち合わせ会報告

瀬戸内海・備讃瀬戸（下図）には大小複数の河口干潟や前浜干潟、洲が点在し、かつてはいたるところでアサリが採取されていたが、とりわけここ数年間でアサリ資源は大きく減少している。しかし、香川大学が主体となり行っている調査の結果として、初夏と秋期に  $10^2 \sim 10^3$  個体/m<sup>3</sup> のアサリ浮遊幼生が複数の観測定点で検出され、依然として相当量のアサリが生息していると考えられる。

本プロジェクトでは、H26年度の下半期よりアサリを主体とした複合生態系利用を検証する目的で、備讃瀬戸を集中観測海域として調査を開始する。そこで本プロジェクトのアサリ班と物理班を中心に、香川大学・東京大学・京都大学・水産総合研究センターの各プロジェクトメンバーが集まり、今年度下半期以降の研究計画について協議を行った。

打ち合わせ会では、参加者全員が香川大学瀬戸内圏研究センターの調査船「カラヌスⅢ」（写真1）に乗船し、アサリ生息場の視察、係留計測器設置場所の選定などを行うと共に（写真2）、一次生産性、アサリ個体群の現状、摂餌生態、流動モデルの観測法について各担当者が報告と観測案の提示を行った（写真3）。

今後の観測計画として、備讃瀬戸全域におけるアサリ浮遊幼生の輸送分散をモデルとして構築する。また、比較的多くのアサリ成貝が生息し、多様な個生態系が存在する特定の湾において、係留系および船上観測によって集中的な観測を行うことで、浮遊幼生の輸送分散過程を詳細に検証し、アサリの複合生態系利用についてモデル化することを目指す。

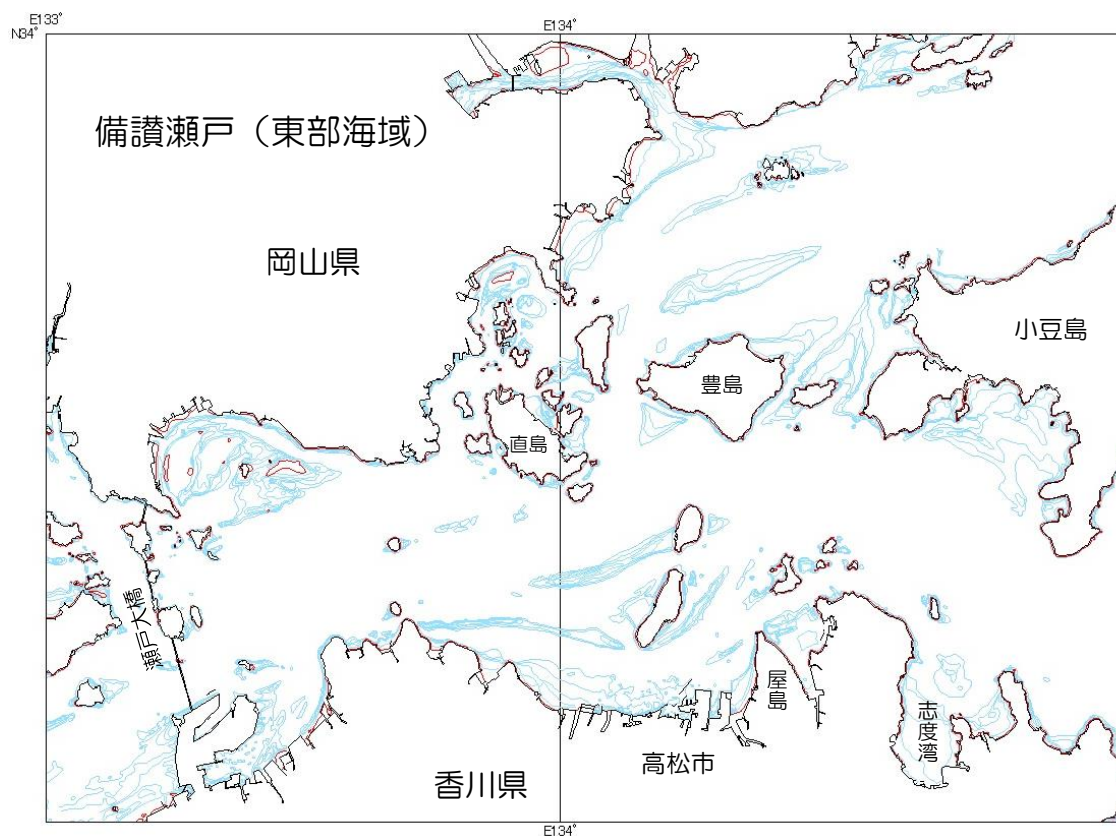




写真1. 調査船カラヌスIII (三宅撮影)



写真2. 係留計測器の設置場所について、操舵室内で議論が行われた (竹茂撮影)



写真3. プレゼンテーションの様子 (大土撮影)